

学校推薦型選抜（文学部）

小論文課題

令和三年十二月十一日

一〇時〇〇分～一二時〇〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この冊子の本文は全部で五頁です。落丁、乱丁、印刷不鮮の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答用紙は、課題（一）用が二枚、課題（二）用が三枚の計五枚あります。解答用紙の指定欄に受験番号（二箇所）、氏名を記入しなさい。
- 四、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 五、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
- 六、草稿用紙が足りなくなった場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 七、解答用紙、問題冊子は持ち帰ってはいけません（草稿用紙は持ち帰ってください）。

次の文章を読んで、下記の課題に答えなさい。

私たちの眼前に、「新しい」名前が次々に現われては消えていく。名前の連続的かつ加速度的な貼りかえとして「現在」が立ち現われ、立ちほだかる。この名前の洪水の中で、自分をとりまく世界との関係についての、根本的な疑念が私たちの内に膨れあがる。

かつて哲学者ホッブスは、人間が世界を構成するすべてのものに名前をつけさえすれば、あとはそれを一旦ばらばらにしてまた組み合わせればよい、つまり名前の足し算と引き算によって世界は認識できる、と考えた。「方法の規則」にもとづいて、このように「名前の帰結に関する計算」を信頼することができた彼は、その限りで幸せであったといつてよい。世界が名前に対してひらかれ、名前は世界を背負うものと想定しえてこそ、その「計算」は成り立つことができたからである。そのとき、名前の普遍性についての確信は、世界認識のための徹底的な方法的態度をもたらすものであった。しかし、その確信もその態度もいまの私たちにはあまりにも遠い。

十七世紀の哲学者の世界ばかりではない。あのヘレン・ケラーの発見、すなわち water という名前を突破口とする、「すべての物は名前をもっている」こと、あるいは世界とは名前であることの発見も、感動的ではあっても疎遠なエピソードにすぎなくなりつつある。すなわち、いまや私たちの「名づけ」に対して、世界あるいは物事の秩序は応答しなくなっているのではないか。ここでは、ばらばらの名前をどのように寄せ集め組み合わせても、それは「物に行く道」にはならないのではないか。名前の次元への私たちのこだわりや、貼りかえられる名前に対する敏感さは、おそらくこのような疑念を裏書きしている。

そうであるとすれば、この「危機の瞬間」に際して、名前をもって物事に相対してきた人間の基本的な経験の有様と、ほかならぬその「名づける」という行為の基底がいわば胎盤剝離しつつあることを見定めなければならぬだろう。

名づけるとは、物事を創造または生成させる行為であり、そのようにして誕生した物事の認識そのものであった。「大汝(おほなむち) 少彦名の 神こそば 名づけ始めけめ」といった神話的な表現は、世界に対する関与の在りかたを端的に語っている。名づけられることによつて「世界」は、人間にとつての世界となった。人間は名前によつて、連続体としてある世界に切れ目を入れ対象を区切り、相互に分離することを通じて事物を生成させ、それぞれの名前を組織化することによつて事象を理解する。このように「名づける」ことによつて物事が生みだされるとすれば、世界はいわば名前の網目組織として現われることになるだろう。したがつて、ある事物についての名前を獲ることは、その存在についての認識の獲得それ自体を意味するのであった。こうして諸々の物が名前を与えられることによつて、たとえばそれが食物か毒物か薬物かを分けされたとき、そこに成立

する名前の体系は、人間とその物とのあいだに数限りなく繰り返されたであろう試験（試験）を含む交渉を背負っているものであり、それは「生きられる」空間が創造されたということであった。

名づけがもつこのような経験の原初的形態は、子供において、その本来の遊びの能力のうちに見出すことができるだろう。社会的存在の「第一日目」ともいべき子供が、世界を自らのものとするべく働きかけるとき、その所与性への正當な無視において、名前にもとづく創造の「奇蹟」的能力が発揮される。断片や破片を組み合わせ、自在に「変形」を加えて、一つの世界をつくり上げるのは子供の特技であるが、その小さな天地創造には名づけの能力が存分に駆使されるのである。

民俗学では、物についての新しい名前の出現が、子供によることが多いことに注目して、この名づけ（造語）の問題を「口承文芸」の一種として考えるようだが、さしあたりジャンル形態にこだわる必要はない。「口承」における定型と即興の相関的な働きが、子供の遊びの構造において中核部分を形づくるということをおさえておけば足りるだろう。子供たちは、既存の社会が与える名前の体系から離脱して、その物との不断の付き合いの中から、たとえば一匹の虫（水すまし）に別の名前（字書き虫）を与えたり、別の草花（スマレとオオバコ）を同一の名前（モウトリ草）で呼んだりするのである。そこには少なくとも、一匹の虫の動きを水面に文字を刻んでいくものとして見ている子供の観察する目があり、草の茎で相撲をとらせることができれば二つの草花を同じ仲間と考える感覚がある。つまり、その名前には、子供とその物との出来事を含んだ生きた関係が示されているのである。そうして本来、すべての物の名前はそうようにして付けられたのであった。名づけの経験について「精神史」的な考察に思いをめぐらすとき、子供における精神のこの働きかたを、繰り返しその「原型」として想起起こす必要があるだろう。

このような子供の命名＝変形の行為が示唆しているのは、物とは本来多様にして変化にみちた相貌をもつものであり、名前の付けかえが可能なのは、その交渉の中で物がその事態に特有の相貌を現わすからであった。すなわち、名前の変更とは物それ自体の相貌を意味する。たとえば子供が水すましを字書き虫ではなく、今度は「腕洗い」と名づけるとき、その虫はもはや水面に文字を書く虫ではなく、別のある存在に相貌しているのである。遊戯的交渉における子供の働きかけとは、その子供に対して世界が生き生きとした固有の姿を現わすということであった。したがって、もし子供が、観察や遊びの対象とする動植物からガラクタにいたる物との相互交渉を断ち切られ、変形能力を封じられてしまうとすれば、その命名経験の不発は、彼らにとって世界の死滅に等しい筈である。

しかし、名前は本当に人間と物事との相互交渉の堆積を担うものであるのか。

名前を通じて本当に世界を了解することが可能であるのか。二十世紀的現代は、この根本的な懷疑から開始されるだろう。多くの人々が、名前について（否定的に）語りはじめる。たとえば、世界の「再生」を希求したブルーストにとって、「どの絵の魅力も描かれた事物の一種の変貌（メタモルフォーズ）にあるということを見分けることができた。その変貌は詩で隠喩（メタフォール）といわれるそれに似通っている。父なる神がものに命名することによつてものを創造したのだとすれば、エルスチール*はものから名前を奪い取るか、あるいはものに別の名前を与えることでそれを再創造する」というように、所与の名前は、物との生きた関係を阻むものとして立ち現われていた。そこで、物がただの物となり果てている状態に対して、それが「変貌」しうる世界へと再創造するべく、「隠喩」の力が切実なものとして求められるのである。物に対する子供の態度、自在に名前を付けかえるその基本的な能力が要請されている、といつてもよい。

生成変化し、思いがけない相貌を帯びる、動的な過程を内包するのが物の本性であるとするれば、したがつて人間にとつて本来、思い通りにはならない活きた他者であるとするれば、隠喩の不可視な「実体化」された世界において、物はいわば扼殺されてしまう。このように変貌の可能性を奪われた物や事、つまり経験の層や質や深さをもたない「物事」へ等質の名前が貼り付けられるとき、実証主義的な感覚が制覇するだろう。そういう名前前の連鎖ないし組み合わせは「事実」と呼ばれる。「驚き」が消失した世界を「事実」が埋めるのである。そこでは既成の名前の対応物として明示されないもの、その意味で名づけえぬものは「ないこと」にされてしまう。想像力が働く余地はおそらくここで極小化されるだろう。かつて人間たちが、その交渉を通じて不可視の、しかし確かな存在として、畏怖をもつて「モノ」と呼んだ精神的実在は否定されてしまう。したがつて現代の実証主義的人間は、本来のモノ性を含んでいない対象のみを「物」と呼ぶわけである。

一本の木の前に立つ人間にとつて、木がそれ以外のものでありえないとき、つまり「木」という名前がその事物（物事）の生成現場へ立ち会うことを阻むとき、名前に対するこの懷疑は敵意に転じるだろう。たとえばダダイズムという運動は、その運動の名称自体がすでに「名前」に対する態度を表明していた。創始者の一人フーゴ・バルによるマニフェストは訴えている。「なぜ木のことをプルプルシュと言えないのでしょうか。また、雨が降っていたとき、なぜプルプルバッシュと言えないのでしょうか。そもそも、なぜ木は何らかの名前で呼ばれねばならないのでしょうか。一体我々は、どこでも必ず我々の口をその何らかの名前に固定しなければならぬのでしょうか。」名前は、事物を自明性の分厚い膜で包み込んでしまっているのではないか。すべてに疑問符をつきつけ、名前のおうい存在形態を打破するとき（「ダダ ム ダダ、ダダ ムフム、ダダ」）、そこには瑞々しい混沌が現出する、と考えられたのであった。

「像の生じない言葉」の包囲に敵対するこの運動には、「世界は創造の第一日目

と同様にいまなお若々しいという証しを立てること」という思いが込められていた。それはいうまでもなく、無謀な解体作業を通してでもその「証し」を立てられなければ、私たちは精神的な死を迎えるほかないという危機意識の表明であった。あるいは、より正確にいえば、現在の「終末」状態をそれとして見据えるには「第一日目」を証し立てなければならぬのであって、それがなければ、私たちはいわば自覚のないまま「死につづける」ほかないのだということであった。そして「死」の自覚のないところに「蘇生」もまたありえない。したがって、物についての所与の「口に固定された名前」の破棄と「世界創造の第一日目」を要請する、このマニフェストは、名づけをめぐる精神史のいわば「前史」が終ったということの宣言でもあった。名前はいまや、物事を生成させ変貌させる相互関係を担うことができず、共同体とその中で生き死にする人間に関与しえず、個人の特徴に注目させる力ももたず、物語を生みだすものでもなくなつた。

現在の私たちにとつて、「忘却」は一つの根本的な主題でなければならぬだろう。実証的な名前の体系によつて形づくられた世界の中で、しかも新しい名前の連続的な交替として「現在」が現われるとすれば、歴史は脱落してしまうほかない。経験の痕跡をほとんど含まない名前の網目を通して、私たちは「事実」に相対さなければならなくなる。このような歴史の瀕死状態の中では、事物の「本当の名前」は忘れ去られかねないだろう。

たとえばカフカは、そのような人間の有様を鮮やかに描き出していた。「あんたがどんな状態なのか、分つて来たぞ、いや、あんたをはじめ見たときから、分つていたのだ。ぼくには経験がある、だから冗談に言うのじゃない、それは陸の船酔いなのだ。あんたは物の真の名を忘れて、いま大急ぎで仮の名を物の上にはばら撒いている、それがこの船酔いの実体なのだ。早く、早く！ とあんたは苛立つ。しかし物から離れるやいなや、あんたはまたその名を忘れてしまふ。野原のポプラをあんたは「バベルの塔」と名づけた、それがポプラだということであんたは知らなかつた、あるいは知ろうとしなかつたからだ。」

ここには、物の本来の名前を忘却しつつある人間の愚かさ、自らの都合に合わせて勝手な名前を付与するその傲慢さと、しかし名前を貼りつけずにはいられない哀れさとが、すなわち、世界との応答関係が失われてゆくなかで、物への接近と離反のほとんど絶望的な反復運動をつづげざるをえない、現代の人間の条件が書きとめられている。

これに対して、「すべての物象化は忘れるということだ。対象は、その一部が忘れられて、そのすみずみまでがはつきりと記憶に残らずに、記憶にとどめられる瞬間に、物象化する」(アドルノ)と言われる。このとき、物に仮の名前をばら撒きつづけている人間たちにとつて、忘れられた真の名前を「思い出す」こと、すなわち忘却による「陸の船酔い」に対抗する意志が要請されるだろう。野原に揺れている一本の木が、本来ポプラと名づけられたものであつたことを、私たちは

「知ろうとする」のである。その場合、この想起への意志は、対象の「真の名」すなわち物事の生成現場への参入の可能性を、ほかならぬ物象化それ自体によって支えられるだろう。部分において記憶にとどめられた瞬間には明瞭でなかった対象の根本的な意味が、「思い出す」作業において、その含蓄の総体を顕らかにし得るのである。時間の経過蓄積と記憶の断片性との再結合が、いわば経験への助走路をもたらすことになる。この限りで、部分的忘却としての物象化が、その痕跡への想像力による働きかけを通じて、物事の「全体像」の実証的復元ではない「回想」を、つまり経験を再結晶させるものとなり得るのである。

*エルスチール プルーストの小説『失われた時を求めて』に登場する画家

(市村弘正『増補』「名づけ」の精神史』より。一部変更)

課題

(一)「名づける」という行為を、筆者はどのようなものと考えているか。八〇〇字程度でまとめなさい。

(二) 文学部で学ぶことについて、右の文章をふまえながら、あなた自身の考えを一〇〇〇字程度で述べなさい。